様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２６７７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２３３５

研究課題名（和文）戦後ドイツ美術における「歴史的アヴァンギャルド」の受容

研究課題名（英文）The Reception of "the historical avant-garde"by the postwar German art

研究代表者
香川　檀（Kagawa, Mayumi）

武蔵大学・人文学部・教授

研究者番号：１０３８６３５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、戦前のいわゆる「歴史的アヴァンギャルド」、とりわけ革新的なダダイズムが、戦後の旧西ドイツの美術研究や展覧会においてどのように再評価されたかを調査した。また同時に、戦後世代の美術家が作品制作にあたって、前世代の前衛的表現をいかに参照し受容していったかについても調査した。その結果、戦前のダダが再発見された1950年代から、大学での研究対象となり、フェミニズムやポストモダンの思想的潮流の影響を受けた80年代にかけて、その受容のあり方が大きく変化していったことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ダダイズムは、通常の20世紀美術史においては、シュルレアリスム誕生までの過渡的な前史として語られる傾向にあるが、戦後ドイツのダダ受容では、ダダを自律的な前衛芸術として位置づけ、現代芸術との関連において評価する研究動向がつよいことが分かった。またその際、ダダの意味づけは、1950～60年代の政治性を重視する見方から、70～80年代の笑いやシニシズムといった精神と思想のパラダイム転換を重視する見方へと、時代の思潮を反映させるかたちで変化していることも判明し、前衛芸術と現代の社会・文化との関係を考える重要な手がかりを得られた。

研究成果の概要（英文）：This research investigates, how the so-called prewar “historical avant-garde”, particularly the radical Dadaism, was revalued by the academic study and art exhibitions of postwar West-Germany. Likewise, it also examines, how artists of the postwar generation found recourse to the innovative styles and techniques created by avant-garde artists of the former generation, adopting such methods in their artworks. As a result, this research elucidated that the valuation of the Dadaism had been distinctly changed throughout the course of its reception, that is, from the point of rediscover in the 1950’s to the era of academic study in the 1980’s, which was influenced by the theoretical currents like feminism and postmodern thoughts.

研究分野：ドイツを中心とした20世紀美術史、表象文化論、ジェンダー論

キーワード：ダダ　美術　前衛　アヴァンギャルド　戦後アート

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．　研究開始当初の背景

（1）　申請者は平成 21～23 年度に基盤研究（C）「ナチズム・ホロコーストの記憶表象研究」を代表者として実施し、戦後ドイツにおける現代アートが表象困難な負の過去の記憶をどのように表現しているかを調査・分析した。その際に、現代アートの表現技法やコンセプトが戦前のアヴァンギャルドの開拓したそれに多くを負っていることを明らかにした。

（2）　その後、平成 25～27 年度には基盤研究（C）「戦前ドイツの前衛芸術研究――ハンナ・ヘーヒを中心に」を代表者として実施し、両大戦間期ドイツにおけるアヴァンギャルド芸術を、とりわけベルリン・ダダに参加した女性美術家ハンナ・ヘーヒについて詳しく調査した。既成の事物や写真イメージを収集し、再構成するコラージュ／フォトモンタージュの原理などについて分析した。その結果、これらの技法や芸術思想が戦後ドイツにおいてどのように再発見され、ダダなどの戦前アヴァンギャルドが美術界やアカデミズムに受容されたかを跡付ける必要性に気づいた。

２．　研究の目的

（1）　戦後の旧西ドイツの美術研究において、戦前の「歴史的アヴァンギャルド」とりわけダダがどのように再評価され、美術界に受容され、アカデミズムにおける美術研究によって意味づけられてきたかを明らかにする。これによって、アメリカにおける通説化した 20 世紀美術史、すなわちシュルレアリスムに至るまでの過渡的段階としてのダダとは異なる独自の位置づけがなされてきた側面に光をあてる。

（2）　また、同時に、戦後ドイツの美術家が作品制作にあたって、前世代の前衛表現をいかに参照し受容していくかについても調査する。これによって、戦前のアヴァンギャルド芸術が戦後アートのなかにどのようなかたちで継承されていくのか、あるいはどこに両者の断絶が存在するのか、を検証する。

３．　研究の方法

（1）　戦前ドイツの前衛芸術に関する文献資料の収集と調査、および戦後ドイツ美術史などの総論や、個別の作家たちのモノグラフを調査する。資料収集と文献調査は、日本国内とドイツ現地において実施した。

（2）　先行して実施した上記二つの科研費研究プロジェクトをつうじて研究協力関係を築くことができたベルリン州立美術館（ベルリニッシュエ・ガレリー）でのアーカイヴ調査、プロイセン文化財団の美術図書館での調査、さらにダダ研究者らとの個別の研究交流を実施した。

４．　研究成果

(1)　3 年間の研究期間で得られた成果としては、戦後ドイツの社会・文化状況の変化のなかで、ダダを始めとする歴史的アヴァンギャルドの受容・評価のあり方が大きく変わったことが解明できたこと（以下の（2）、（3）で詳述）、それと同時にフェミニズム・アート運動やジェンダー美術史によるアヴァンギャルド受容と研究が、もう一つの流れを形成したことが明らかになった（以下の（4）で詳述）。この動向を検証するなかで、戦前のベルリン・ダダ運動の理論的指導者であったラウール・ハウスマンとその伴侶ハンナ・ヘーヒという二人の前衛芸術家に焦点を絞って、その受容史を調査し、英米圏の文献ではまったく視野から漏れている前衛芸術とポストモダン思想との関連を、ドイツの最新の研究も踏まえつつ明らかにできたことが、本研究の独創的成果である。また、この研究から得られる前衛美術の読解の新たな可能性を、応用した研究例として、ドイツの写真研究者カタリーナ・ズュコラ氏を日本に招聘し、連続講演会を実施できたことも、大きな収穫であった（以下、（5）で詳述）。

（2）　戦後のダダ受容の第Ｉ期は、1950 年代末から 60 年代にかけての時期にあたる。戦後の西ヨーロッパを席巻した抽象表現主義やアンフォルメルに対して反発した若い世代が、新たに兆しはじめたネオダダやポップアートの潮流に触発され、ドイツにおける戦前のダダに関心を向けたのである。1958 年、前衛美術のひとつの中心地デュッセルドルフで開かれたダダ展には、若い世代のアーティストが多く訪れ、そのなかから 60 年代以降のネオアヴァンギャルドを牽引していく人材が輩出することになった。ここで再発見されたダダの美学とは、「生と芸術との統一」というモダニズム芸術の一路線の延長であり、現実を作品に採りこむための手段としてコラージュやモンタージュの原理が再評価された。現実の断片的物質を再構成することで仮象の統一を破るこの原理は、反省的中断という作用美学をもつものとして絵画からアクション、パフォーマンスにまで拡大されていく。さらに、この唯物論的な現実社会への参照性は、ハプニングというかたちで社会への批判的介入へと展開する。戦後の東西冷戦が進行するなかで奇跡の経済復興をとげつつあった西ドイツは、政治の不条理を抑圧する心理的「凝固」を起こしていた。その殻を、美的暴力すなわちショック・挑発・破壊的暴力

の表現によって、傷痕のかさぶたを剥がすように打ち破ることができ、結果として社会に変化をもたらすことができるという信念が抱かれていたのである。かつてのダダが世界戦争という危機への反応として生まれたのに対し、戦後のダダ受容は、さしあたりまず「偽りの平和」を揺るがすショック療法の手本として要請された。ダダはこれら社会意識に裏打ちされた表現の淵源として理解され、古典的モデルネ、歴史的アヴァンギャルドとして前衛芸術史に地歩を確立したことが確認できた。

(3) ダダ受容の第Ⅱ期は、ドイツ赤軍派テロの敗北などによって若者世代の政治革命に対する挫折感が広まり、前衛の反抗精神が後退した 1970 年代後半から 80 年代にあたる。この時期、ダダは大学などアカデミズムでの研究対象となり、ポスト構造主義やジェンダー論など新しい思想的潮流のなかで、もともと多面的な運動であったダダの、以前とはべつの位相が強調されるようになった。いわゆる「脱構築」による、目的合理性や全体的思考を批判するポストモダンの思想にとって、ダダのロゴス中心主義批判や、言語とイメージの断片化の実験は、まさに親和性をもっていたのである。そして、こうした現代思想の傾向に少なからぬ影響をあたえたニーチェの哲学と、彼の実験的かつ創造的な懐疑主義を奉じたベルリン・ダダの指導者ラウール・ハウスマンに、新たな研究の関心が注がれるようになった。こうしたニーチェ思想によるダダの再解釈は、例えば美術史家ハンネ・ベルギウスのベルリン・ダダ論『ダ・ダンディ――虚無からの道化芝居』(1977 年、邦訳 1979 年)、および『ダダの哄笑』(1989 年)のなかで精力的に展開されている。

ダダの思想と表現がもっていたこのような価値転覆的な面について、ニーチェからさらに遥か古代ギリシアのディオゲネスにまで思想的ルーツをもとめたのが、ペーター・スローターダイクの『シニカル理性批判』(1983 年、邦訳 1996 年)であった。スローターダイクは、「シニシズム」と「キニシズム」の対概念を提唱し、それを戦間期ワイマール文化のダダのなかにもとめている。特徴的なことに、スローターダイクが皮肉で超然としたキニカルなダダとしてもっぱら参照するテクストは、やはりベルリン・ダダのラウール・ハウスマンの著作である。ハウスマンは無政府主義的な共産主義「アナルコ・コミュニズム」を標榜し、特定の政治イデオロギーや党派に縛られない立場をとっていた。そして、一義的なメッセージよりも多義的で遊戯性にとんだ表現をめざしたのである。あらゆる思惑から自由であることがダダイストの特権であると考えるスローターダイクのダダ観はここに拠っている。ダダはこうして、現実の政治空間ではなく、象徴空間での意味論と主体論のレベルで、モダニズム的ショックの美学から、ポストモダンのイローニッシュな笑の美学へと鋳直されていったことが明らかになった。

(4) ダダのジェンダー視点からの読み直しは、上記の第Ⅰ期から第Ⅱ期への移行期、すなわちダダがアカデミズムの研究対象となりつつあった 1970 年代半ばに開始された。ベルリン・ダダの唯一の女性メンバーであったハンナ・ヘーヒは、ラウール・ハウスマンの女友達として運動に加わり、ブループ展にフォトモンタージュなどの作品を出展したが、あくまで運動の周縁的存在にとどまった。しかし、戦後 60 年代から主要な美術館に彼女の作品が収蔵され紹介的な批評文が書かれるようになり、やがてフェミニズムの機運のなか、美術や美術史を学ぶ若いアーティストや研究者のあいだに、当時まだ存命だったヘーヒへの関心が高まったのである。1978 年にゲルトルート・ユーラ・デッヒがベルリン自由大学に提出した博士論文「ダダの庖丁で切り刻む――ハンナ・ヘーヒのフォトモンタージュに関する研究」(1981 年に単行本として刊行)は、明確にフェミニズムの視点を打ち出している。ヘーヒのフォトモンタージュ作品に関するこの論文では、冒頭のダダ論において運動体のなかの女性メンバーという位置についての考察がなされ、当時の欧米でフェミニズム文化研究によって明らかにされた美術における男性中心主義がダダの場合にも例外ではなかったことが指摘されている。そして、写真の断片を再構成するフォトモンタージュが生成させる意味のあり方を、かつてのベルリン・ダダ研究のように直接的な政治メッセージを前提とする解釈ではなく、懐疑的でイローニッシュな距離をおいてイメージの重層性のなかから立ち上がる読解の可能性として理解していくのである。このような美術史研究は、80 年代に盛んとなるポストモダンの批評理論からも影響を受けていた。こうして、大学というアカデミズムの場において、ダダ研究とジェンダー研究とが出会うことになったのである。

(5) 上記のダダ受容に関する研究と並行して、戦後のアート作品や写真作品を調査し、戦前アヴァンギャルドの技法や芸術思想の継承という観点から再読する研究を参照した。そのような研究を実践されているドイツの写真研究者カタリーナ・ズュコラ氏(ブラウンシュヴァイク美術大学教授)を日本に招聘し、2017 年 11 月に 3 回にわたる連続講演会を実施した。これによって、戦前アヴァンギャルドが開拓した写真技法(とくにコラージュや写真アルバム形式)が現代アートにも応用されていることが分かった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　5 件）
①香川檀、ベルリン・ダダの戦後受容とハンナ・ヘーヒ――美術研究におけるポストモダンとジェンダー、美術運動史研究会ニュース、査読有、No.168、2018、pp.1-6.

②香川檀、書評「モダニズム美術の危うさ――利根川由奈『ルネ・マグリット――国家を背負わされた画家』」、表象文化論学会『表象』vol.12、2018、pp.267-270.

③香川檀、〈ダダの美学〉の今日的意義――スローターダイクの芸術論、同志社大学『エコ美学＆科学国際研究センター2016 年度研究成果報告集』、2017、pp.127-134.

④香川檀、アートにみる女性作家の暴力表現――ニキ・ド・サンファルとレベッカ・ホルン、国立新美術館研究紀要、vol.3、2016、pp.324-330.

⑤香川檀、即物的アルバムと魔術的ヴァニタス――ハンナ・ヘーヒ、〈ポスト・ダダ〉のイメージ思考、『ユリイカ』臨時増刊：ダダ・シュルレアリスムの 21 世紀、青土社、2016,pp.280-293

〔学会発表〕（計 4 件）

① 香川檀、ワークショップ「アヴァンギャルドとジェンダー」コメンテータ、東京外国語大学、2018 年 10 月 3 日
② 香川檀、ダダの美学の今日的意義――スローターダイクの芸術論、美学会第 67 回全国大会シンポジウム「特集：テロリズムの時代のアートと美学の役割」、同志社大学、2016 年 10 月
③ Mayumi KAGAWA, Photographic Scrapbooks and image-thinking : on Hannah Höch's *album*, 国際美学会第 20 回大会、ソウル大学（韓国）、2016 年 7 月
④ 香川檀、ハンナ・ヘーヒの〈アルバム〉――写真スクラップに見る知覚の実験、国際シンポジウム「アヴァンギャルドの知覚」、ラウンドテーブル「不透明なガラス 2」、東京外国語大学（東京・府中）、2016 年 7 月

〔図書〕（計 1 件）
①香川檀、『ハンナ・ヘーヒ――透視のイメージ遊戯』水声社、2019 年 7 月（予定）、総頁 340 頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：

国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。